

2025（令和7）年度

1日[*]

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**黒色鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入すること。**
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

自己責任論の批判と責任ある行為の推奨の両立をめぐる問題は、近年注目を集める健康の社会的決定要因に関する議論において顕在化する。職業、学歴、家族関係、居住地域、利用可能な社会保障制度など、さまざまな社会的・経済的背景が人々の健康状態を左右している。

これらの知見に基づいて、しばしば自己責任論に対し、不健康は個人にコントロール可能な要因のみに起因するものではない、という形での批判がなされてきた。自己責任論は責任帰属の条件として本人によるコントロール可能性を置いている。だとすれば、不健康が本人に選択不可能な生まれつきの社会的・生物学的ジョウキョウに大きく影響されていたり、さらには健康リスクの高い行為を選ぶことさえ部分的に社会経済的な背景に由来したりしている場合、不健康について本人に（部分的にはともかく）全面的に責任を帰することは明らかに不適切であることになる。たとえば青年期に形成された喫煙習慣は環境に起因する部分が大きいと考えられるため、その結果としての不健康を本人の責任とするのは難しいだろう。

健康の自己責任論と健康の社会的決定要因の関係は、不健康につながる行為が一度限りのものではなく、生活の中で何度も繰り返されるものであることをふまえれば、よりいっそう強調されることになる。一定のキケンのあることが明らかならスポーツを行った結果として怪我をすとか、十分な殺菌がされていない食品を（そのことを承知の上で）食べた結果として食中毒を起こすとかいった場合には、個人の選択と帰結との関係性はある程度明瞭である。ところが現代社会で大きな問題となっている慢性疾患の場合、生活のさまざまな行為が少しずつその **I** を高めていく。そういった習慣的な行為は、個人

の熟慮に基づく意思決定よりも社会的背景に規定されるとみなす方が、いっそう理に適っているように思われる。《 a 》文化人類学者の碓陽子は、そのような「累積的リスク」の積み重ねそのものについての意思決定は存在しないにもかかわらず、さもそのような決定が存在しているとみなすことで、個人が本来ありえない責任主体として作り出されると指摘している。私たちは日常的に「ライフスタイルの選択」という言い方をしているが、実際には食事や運動についての

無数の選択であり、ライフスタイルそのものを選択しているわけではない。にもかかわらずライフスタイルと疾病の相関関係から個人の選択があつたのだと捏造され、本来選んでいないものを選んだものとみなされてしまうことになる、というわけである。

しかし、健康の社会的決定要因の指摘に基づく自己責任論批判は、果たして有効なものなのだろうか。以下、二つの観点から、この批判には困難があることを論じたい。

まず第一に指摘できるのは、健康の社会的決定要因を論拠とした自己責任論の批判は、自己責任論の前提を取り違えている可能性がある、ということである。《 b 》

健康の社会的決定要因を論拠とした自己責任論の批判は、上に見たように、不健康は個人の行動の直接の帰結ではないと指摘することで、自己責任論が前提している、「ある個人が自身の行為とその帰結に対して適切なコントロールを有しているならば」という条件が成立していないことを指摘するものである。人々の健康状態には、本人の選択の結果とは言えない社会的な要因が深く影響しているとすれば、この条件は成立しない。それゆえ不健康について当人に（少なくともそのすべての）責任を帰することは適切ではないことになる。《 c 》

しかしながら、そもそも自己責任論がコントロール可能性についての条件を前提していると考えすることは適切なのだろうか。もちろん自己責任論の主張そのものを見れば、そこにはコントロール可能性についての議論が明確に表れている。それはあなたがしたことなのだから自分で責任を取れ、という主張が自己責任論を形成しているわけである。とはいえ、現実の私たちの責任帰属の実践を考えてみると、必ずしもコントロール可能性によって責任帰属がなされているわけではないことがわかる。いくつか例を挙げよう。

第一に、ある行為に関する責任が行為者本人以外の人物に帰せられるケースが存在する。端的な例として、ある組織の「責任者」はその組織に属するすべての人物の行為に対して責任を負うものであり、組織内の人物の行為の責任は行為者本人ではなく（あるいは本人のみならず）その責任者にも帰せられる。責任者が部下の引き起こした事態に対するクレームについて、

それは私がしたことではないと言って責任を拒否することは、道徳的に許容されないだろう。

第二に、行為の責任はあくまで行為者本人に対して帰せられるとしても、その責任帰属がコントロール可能性を条件としていないケースも存在する。交通事故のうち、子どもが（対処がまったく不可能なほど）きわめて急に飛び出してきて、運転者本人に事故を避けることができなかつた場合であっても、本人には（法的な責任のみならず）一定の道徳的な責任が帰せられる。その人が、その事故は私には避けられなかつたのだと言って責任を拒否することは、たとえ事実においてはその通りだったとしても、道徳的に許容されないだろう。

以上のように、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではない。であれば、責任帰属の一つの実践である自己責任論もまた、コントロール可能性を前提しているとは限らない（前提しているかもしれないし、していないかもしれない）。そして、もし仮に前提していないのだとすれば、コントロールを有していなかつたという指摘に基づく反論は、有効ではないことになる。

言い換えれば、自己責任論は、当の帰結が究極的にあなた自身の行為に起因しているのかに関わりなく、あなたは当該の帰結について自身で責任を負うべきだ（社会的な手助けを求めるべきではない）という主張をしているのかもしれない、ということである。そのような主張は一見したところ無理筋であるが、しかし、何が本人の責任に帰せられるかの線引きが非常に

II であること、そして時として社会的な望ましさⁱに由来するものであることを指摘する研究もあることをふまれば、そのような主張がありうると考えることは決しておかしなことではない。《 d 》

自己責任論を健康の社会的決定要因に基づいて批判することが自己責任論を乗り越える上で適切なものとはならない可能性を指摘する、二つ目の議論に移ろう。健康の社会的決定要因に基づく批判は、不健康は個人の行動の直接の帰結ではないということを示唆する。しかしこのような見方は、先に触れた問題関心（すなわち公衆衛生政策を推進していくという問題関心）からすれば、むしろ悪手ⁱⁱであると考えられる。というのも、本人が健康につながる行動を取ることができるかどうかは本人にコントロールできるものではないとしてしまえば、より健康を増進ⁱⁱⁱする行動を取るように要請することもまた不合理であること

になつてしまふからである。

過去の不健康行動について、そのような行動を取るとは環境によって要請されていた（そうしないことはできなかった）のだからペナルティに値しないと論じながら、同時に将来の行動については個人の自由の余地を認めるのは整合的な主張ではない。実際のところ、健康の社会経済的決定要因の理解が公衆衛生に組み入れられたことで、病気や障害のある人々に対する道徳的な非難を回避するための理論的基盤が提供された一方、健康は個人のコントロール下にあるものとは感じられなくなり、個人への政策的な働きかけが困難になつたという指摘がある。《 e 》

これは単なる整合性の問題を超えて、倫理的な問題でもある。個人の自律的な行動変容の可能性を最初から含み入れない態度は、個人の尊重に失敗する可能性があるからである。政治哲学者のエリ・フェアリングは、患者の行動変容の可能性を否定することが、当の人々を自律的存在に満たないものとみなすことになつてしまふという問題を指摘し、次のように論じている。「患者の自律的選択の尊重が現代のヘルスケアに深くシントウ⁽⁹⁾していることをふまえれば、十分な判断力を有しかつ十分に情報を与えられた個人は自分自身の利益の最善の解釈者であり、他者が彼らのためにならないと判断するような選択であっても自由になすことができるべきである、という主張に価値を置くべきとする強力な理由が存在する」。医療倫理学者のダニエル・ウィクラーもまた、責任を理由にしたヘルスケア提供の縮小を批判しつつも、個人の主体性の観点から、健康に対する個人の責任は全面的に無視されるべきではないと主張する。彼が強調するのは、「何より、健康に対する個人の責任の感覚を促進することは、「積極的自由」あるいは「エンパワメント」のプログラムの一部分でありうる」という点である。

もちろん、健康の社会的決定要因の存在を根拠に責任帰属に反対する議論も、責任帰属の余地がまったくないとまでは論じないものがほとんどである。言い換えれば、すべてが社会的に決定されており、個々人の選択の余地がないと論じられることはまずない。しかしそうだとしても、当人にコントロール不可能な要因を強調すればするほど、X、というトレードオフの関係があることは否定できない。ゆえに上述の問題は、たとえ社会的決定要因による全面的な決定を支持しなくても、それらの要因のコントロールの難しさを根拠に責任帰属に反対する限りは、回避できない。

先に見たように、自己責任論は個人の尊重に失敗している。自己責任を強調することは、健康を損なった人を道徳的に劣った人物とみなすことにつながるからである。しかし他方で、健康のコントロール不可能性を強調することもまた、別の意味で個人の尊重に失敗しうる。個人の行為が背景要因によって決定されているとみなすことは、健康を損なった人を道徳的な意味での主体性を有する存在とはみなさないことにつながるからである。自由に選択する主体であると自認し、また他者からもそのようなみなされることは、自由で平等な存在として社会に参加していくための不可欠な条件である、ということを実際に考えるならば、私たちは個人が責任を有する主体であるという見方を捨て去ってしまうべきではない。しかしそれが自己責任論に結びついてしまってはならない。それゆえに、自己責任論の批判と個人の主体的努力の擁護、この二つの両立の可能性が問われなければならない。

(玉手慎太郎『公衆衛生の倫理学——国家は健康にどこまで介入すべきか』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

注 エンパワメント——ここでは「健康を自己決定する権限」といった意味。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ジョウキョウ

- 1 筆者の主張に深くキョウメイする
- 2 報道機関との間にキョウテイを結ぶ
- 3 ゆがんだ姿勢をキョウセイする
- 4 国王にキョウジュンの意を示す
- 5 野球のジツキョウ中継に耳を傾ける

(イ) キケン

- 1 質素ケンヤクを心がける
- 2 念のため医療ホケンに加入する
- 3 ケンアン事項が解決に向かう
- 4 裏切りのケンギをかけられる
- 5 現場から指紋がケンシユツされる

(ウ) シントウ

- 1 優秀な人材をトウヨウする
- 2 トウカのもとで読書にふける
- 3 トウテツした理論を展開する
- 4 難しい問題についてトウギする
- 5 景気動向のトウケイを確認する

問二 二重傍線部 i・ii の漢字について、本文中の意味と最も近い意味を含んだ例文として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

i 無理筋

- 1 彼の言い分は、十分筋道が通ったものだった
- 2 細部にまでこだわる彼女の意識は筋金入りだ
- 3 初めて触った楽器にしては手筋がよいですね
- 4 先輩からの叱咤激励に背筋が伸びる思いがした
- 5 あの店の主な客筋は、近隣のマンションの住人だ

ii 悪手

- 1 何か意見がある時は、挙手するようにしましょう
- 2 舞台の上手から花形役者が登場し、拍手が起きた
- 3 ペットが亡くなり、心に深い痛手を負ってしまった
- 4 新規事業は混乱を極め、もはや打つ手が無い段階だ
- 5 使わなくなったテーブルの引き取り手を探しています

問三 空欄 I ・ II に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| I | 1 一般性 | 2 蓋然性 | 3 可塑性 | 4 偶有性 | 5 流動性 |
| II | 1 威圧的 | 2 画一的 | 3 逆説的 | 4 恣意的 | 5 即物的 |

問四 本文中の空欄《 a 》《 b 》《 c 》《 d 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

これは一見して妥当性のある反論である。

- 1 《 a 》
2 《 b 》
3 《 c 》
4 《 d 》
5 《 e 》

問五 傍線部 A 本来ありえない責任主体として作り出されているとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 家族関係や居住地域といった自らがコントロール不可能な条件も自らが選んだかのように誤って認識されること
- 2 不健康は個人にコントロール可能な要因のみに起因するのだとして、自らの生活習慣を改善するよう迫られること
- 3 自らが環境を構成する一要素であることを理由に、環境に起因する不健康に対しても不当な責任を負わされること
- 4 微細な選択の誤りを繰り返したただけなのに、大きな過ちを犯したせいでは不健康であるとのレッテルを貼られること
- 5 自らが選んだとは言い難い難しい生活様式に起因する不健康について、自分の選択のせいであるかのように扱われること

問六 傍線部 B 自己責任論の批判とあるが、自己責任論を批判する側は自己責任をどのように考えているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分が直接行った行動に起因しなくても、その結果に道徳的な責任を負うべき立場は存在するという考え
- 2 自分自身が直接行い、制御が可能であったはずの行為と結果に対して責任は追及されるものだという考え
- 3 自分が行った行為については、それが制御可能であるかどうかにかかわらず結果への責任が伴うという考え
- 4 社会的・生物学的要因のような、本人の予測が不可能な条件に起因する結果の責任は追及されないという考え
- 5 自分の行動を制御できずに不健康になった人でも、それを理由に責任を追及されない可能性があるという考え

問七 傍線部C 単なる整合性の問題を超えて、倫理的な問題でもあるとあるが、どのような「問題」なのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自己責任論は、過去の行動と未来の行動について異なった責任を追及しているうえに、その考えがより大きな価値である自由を損なっているという問題
- 2 自己責任論を批判する主張は、健康行動を個人に求めるという点において不合理であるという以上に、自由という個人の尊厳を軽視してしまっているという問題
- 3 自己責任論は、この主張に対する批判に対して矛盾のない反論ができないばかりか、さらに個人の自由や努力の裁量を認めない主張をも繰り返してしまっているという問題
- 4 自己責任論を批判する主張は、不合理かつ自由を制限しているという点で、個人の自由を認めるところから生じる自己責任論よりも説得力を欠くものとなっているという問題
- 5 自己責任論批判への問題点を指摘しようとすると、図らずも自己責任論擁護の姿勢を取ることになり、結果的に個人の自律的選択に疑義を呈する結果になってしまうという問題

問八 空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 当人に健康行動を要求できる範囲も縮小されてしまう
- 2 本来の意図とは逆に自己責任論に賛意を示してしまう
- 3 人が備えているはずの責任能力の存在を否定しかねない
- 4 不健康な人がむしろ責任を追及されているように感じる
- 5 不健康の要因である社会的要因の深刻さが浮き彫りになる

問九 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自己責任論は、環境や社会的背景に依存して選択された行為やその結果については責任を追及しない主張である
- 2 自分を不健康にする選択であっても、その行動を選択する自由の価値のほうを重んじる、という立場も存在する
- 3 自分が行っていない行為や自分がコントロール不可能であった行為であっても、責任を問われることはありうる
- 4 不健康な人の個人的責任を問わないことは、一方で自律的な個人を認めない考え方に通じてしまうという側面もある
- 5 自己責任論の視点から見れば、自己責任論批判は責任帰属の現実を隠蔽しようとしているという反論が成り立つ
- 6 自己責任論批判は、その批判対象である自己責任論同様の帰結にいたる可能性を含み持つことを筆者は指摘している

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

AlphaGo^Bは、囲碁に特化した人工知能であり、人間の持つ知能一般を実装したものではない（少なくとも今のところは）。この点についてもすこし議論すると、「弱い人工知能^A」という言葉の裏には、人間の持つ知能そのものを代替するものではないという視点がある。

たとえば、地球のどこかには囲碁をする蟻が存在していて、彼らは集合的な知能をハッキ^(ア)して人間を凌駕するような手を打つことができるかもしれない。だがそれはあくまで昆虫的な論理を用いて本能的な行動をしているだけなのであって、「人間」の持つ人間的な感性やひらめきは完全に欠落している。だが囲碁を打つというその一点に限って言えば、その囲碁蟻は人間に勝つことができる。つまり、AlphaGoはそのような囲碁蟻の立場を代替しているだけではないのか、ということなのである。この文脈においては、AlphaGoの持つ知能は人間の知能とまったく異質な存在かもしれないということであり、またそうであつても構わないということになる。

もともと人工知能は人間の知能を代替できる存在として真面目に議論されていた。実際、コンピュータの I 期において、そのアーキテクチャは実際の人間の脳を参考にしていたのである。いや、それどころか一九八〇年代に入ってからでさえ「強い人工知能^B」の実現を信じている研究者は少なくなかった。日本においても、人工知能と関連の深いプロジェクトが実施されていたのである。

ところが、二〇世紀後半に入ると、だれも「強い人工知能」について（肯定的な文脈では）口にしなくなった。一体何が起きたのだろうか。一言でいえば、巨額の予算を投入して実施された巨大プロジェクトを含む試みがあつたにもかかわらず、当初研究者が思い描いていたような意味で「強い人工知能」が実現しなかつたということが大きいと思う。というよりも、そもそも「強い人工知能」が一体何を指すのか研究者自身がよくわかっていなかったことが、はつきりしてきたという言い方が正しいかもしれない。多少意地悪な言い方をすれば、問題設定の時点で「強い人工知能」はつまづいていたのである。

人工知能といったとき多くの専門家が意図するのは、この「強い人工知能」ではない。特定の目的に特化したツール（もしくは静的なソフトウェア）であるところの「弱い人工知能」の方である。ここでもうすこし「知能」もしくは知的能力という概念について議論をしてみたいと思う。この自己言及性を含む言葉は、しばしば私たちの議論の方向性を見失わせるからである。必ずしも肉体的な能力に秀でていない人類が、知的能力を駆使して過酷な環境を生き抜いてきたことは先にも触れたが、私たちの自尊心や思い入れとは別に、知的能力は必ずしも人間固有のものではない。人間以外の霊長類が思いのほか賢い（しかも人間的な意味で賢い）ことはひろく知られている。私たち人間には、人間よりも知的能力の低い動物が人間らしくふるまう様子を見て、喜びを感じる傾向がある。その根源的な理由が何であるのかはさておき、そのような **II** のおかげで、非人間の知性についての研究はそれなりに進んでいる。

最近になって、鳥類が相当の知的能力にメグ¹まれていることもわかってきた。道具を使ったり、論理的な推論をしているらしいことが示唆されているのである。とはいえ、鳥類の知能については重要なポイントがある。これまでの研究成果を見る限り、どうやら彼ら鳥類は霊長類とは異なり、人間とは異なる種類の知能（もしくは知性）を進化させてきたようなのである。

私たちは漠然と人間中心主義的な考え方を癖（もしくは **III**）があるため、知性というものに暗に人間的なものを求める傾向がある。しかし、鳥類は「爬虫類」である恐竜の子孫であるし、何よりも飛翔能力によって三次元的な世界を生活圏として進化してきた。これはどういうことかとすると、たとえばA地点からB地点に移動しようとするとき、私たち陸生動物は地形に沿った経路を捜す。しかし鳥類は、風速等の大気の状態を加味した上で、A B間の直線的な経路を取ろうとする。両者のあいだには明確な認知上の差異があるということなのである。

あるいは、鳥類は陸生動物とは比較にならない長距離を移動する能力を持っている。鳥類の視覚能力が優れていることはよく知られているが、両眼以外の第三の「眼」を持ち合わせていることもわかっている。鳥類はなんの視覚的標識もない海上を、方向を違えず目的地に向かって飛行することができる。鳥類は長距離航行において、光学的な参照である太陽の位置と、地球の磁場を用いるといわれている。たとえば、この第三の「眼」によってもたらされる〈視野〉は、人間にしてみれば超感覚と

も呼べるものである（人間の場合、この目に相当する器官は松果体しょうかたいであり、光を感受する能力は失われている）。つまり、鳥の世界と人間の世界とは、その性質が根本的に異なっている可能性がある。

よく言及されるたとえ話に、球面上の蟻の話がある。バレーボールやサッカーボールのような球面上の蟻は、そこを一樣な二次元空間だと信じているというのだ。蟻のサイズからすれば、局所的には球面も平面で近似できるからである。だから、蟻は真つ直ぐに進んでいるつもりでも、いつのまにか元の地点にもどってきてしまうということを本質的な意味では「理解」できない。その球体から離れ、別の場所に移動することはもちろん可能なのだが、蟻は物理的な空間がそのような特徴を持っていることも「理解」できない。蟻が基本的には二次元空間で進化してきたからというのがその理由づけである。ちなみに、蟻は三次元的な巣を作ることができるが、その構造は二次元のネットワークにマップされているのであって、蟻は二次元空間のある二点間を最短距離で結ぶことはできないと考えられる。

このような話をする、人間はすでに三次元的な視野を手に入れているのではないかと反論されるかもしれない。たしかに、私たちは飛行機という機械で三次元的に移動することができるし、地球が丸いことも知っている。

だがそれは、この数百年程度の間の話である。私たちの思考形態やその背後にある脳の基本的なアーキテクチャは、進化によってもたらされたものである。ある生物にとっての生存空間が、その知能の方向性に支配的な影響を持つことは想像に難くない。魚は魚の、鳥は鳥の、人間は人間の世界観を持つ。その意味において、私たちは球面上の蟻を決して啜むうことはできないのだ。なにしろ科学的な物証が揃っていただけにもかかわらず、人間たちが自分たちの生存空間である地球が丸いことを認めることに大きな抵抗を示したのは、歴史的な事実なのであるから。

その一方で、地球規模で移動する鳥類は地球が丸いことを人類よりも先に知っていたのかもしれないのである。もしかすると魚類も?!

私たちの脳が進化によってかたちづくられていたとき、私たちには三次元的世界のなかで自由な視野を持つ術はなかった。もちろん、私たちは言語という強力な抽象化の手段を持っているために、抽象的なレベルでは自由な発想の翼を羽ばたかせる

ことはできる。しかし、私たちの世界の根底にある精神的な構造は、私たちが飛行機などのテクノロジーにより本格的な三次元世界を手に入れるよりもずっと以前に確立したものである。

それに引き替え、鳥類は進化の過程で視覚的な意味での三次元的な世界を獲得し、発展させてきたと考えられる。彼らにとつての空間は、人間のそれとは比べものにならない豊かな構造を含んでいるはずである。とはいっても、鳥ならざる私たちに本質的な意味でそれを理解することはできないではあろうけれど。

さらにいえば、私たちが「客観的」に存在していると信じている物理的な空間の特徴も、人間固有の空間認識能力に基づいたものにすぎないのかもしれない。つまり私たちは電磁気学を学ばない限り、電磁波の特徴を「理解」できない。しかし鳥類は生得の能力のみで電磁気学的空間を理解できているのかもしれない。ちょうどレーダーという機械が電磁気学的空間を「理解」できるように。

この、人間のいわば認識の地平線の向こう側にある世界は、生物学的な特徴の違いによって隔てられているに違いない。私たち人間が、人間の知性は宇宙をも征し、無限の翼を持っていると **IV** のは勝手だが、科学的な視点からすこし考えればわかるように、その自己満足はいささかナイーブすぎる。人間は哺乳類の一グループである霊長類のなかの生物種のひとつにすぎないのであるし、実際のところ、人間を人間以外の生物と分かつ決定的な遺伝子はまだ見つかっていない。人間が私たちにとつて特別なのは、私たち自身が人間であるからにすぎない。したがって、 **X** 。

すなわち、それぞれの生物種は、その内的世界として異なった知的能力の宇宙を持っていると考えるのが合理的である。そして、その多様性は進化の過程によつてもたらされている。「知能」というものを科学的に扱おうとすれば、この人間以外の生物の知性もきちんと記述しなくてはならない。おそらく現在の人工知能をめぐる議論には、この進化的視点が決定的に欠けている。これは、「人工知能」を搭載するラリレロロボットに関する議論にもあてはまる。^注

知的能力とは、決して抽象的な存在ではない。コウショウな人間が日当たりの良い午後のサロンのなかで作り上げた、貴族趣味の文学や詩のような上品なものでもない。過酷な自然環境のなかで、なんとか生き延びるためにさまざまな生物がひねり

出した、やむにやまれぬ工夫の積み重ねなのである。

もし私たちが本気で「強い人工知能」の実現をめざすなら、いきなり人間的知能（と私たちが勝手に呼ぶ知的能力）から始めるのではなく、自然がたどってきた知能の進化の過程にまず眼を向けるべきなのである。たとえば、電車のなかで咳をこらえている人がいる。だが本人の意志とは関係なく、その人は咳き込み周囲の乗客から冷たい視線を浴びる。

咳はからだの防御機構の一種で、体内の異物を排除しようとする反射的な生理現象である。だが実のところ、すでに風邪ウイルスに感染してしまったあとの咳に、防御という観点から意味があるかどうかは疑問である。人間のからだに感染したウイルスにとっては、いかに自分の持つ遺伝情報を他の宿主に拡散するかが重要である。明らかに、ひとつの個体に留まっているのは得策ではない。宿主の自律神経系になんらかの手段で干渉して咳を誘発し、みずからのコピーを拡散させるというのは、明らかにウイルスの側の都合に沿った戦略である。

これをウイルスの知能といわずして何と呼ぶべきだろう。ここでは、ウイルスに知能を実現するための脳神経系などないではないか、というような反論にはあまり意味がない。そもそも脳神経系が知能にとって必須だというのは、私たちの人間中心主義的な思い込みかもしれないからである。なにしろ人工知能が実装されるコンピュータには、生物学的な意味での脳神経系など存在しないではないか。「知能」という言葉の持つ日常的な語感から離れ、客観的な議論に集中しようとするれば、人間以外の生物の知能がこの世界に溢れていることにすぐ気づくことだろう。生存のための戦略は、微生物から脊椎動物に至るまで、無生物ではありえない能動的な意図を含んでいる。その意味で、ほとんどすべての生物は、なんらかの意味での「知能」を備えているといっても良いのではないか。

このような比較解析を通して「知能」が進化によっていかにかたちづくられてきたかを熟慮すれば、私たちはいつか意識を含む「強い人工知能」に到達できる可能性はある。

（斎藤成也・太田聡史『ワリレロボットの未来 5分類からみえてくる人間とのかかわり』による。）

出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注 ラリルレロボット——筆者は、あまりに多様なロボットという概念を五段階に分類して「ラロボット」～「ロボット」

と名付けた。そして、「CPU（中央処理装置）を搭載し、広義のセンサーを持ち、自身の判断で自律移動できる、ヒト型のマシン」を最も進んだ「ロボット」と定義し、発展の中途段階のものも含めて「ラリルレロボット」と総称している。

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ハツキ

- 1 液体が常温でキハツする
- 2 政界再編をキトする
- 3 平和を強くキキユウする
- 4 カイキ月蝕を観測する
- 5 彼は人権運動のキシユだ

(イ) メグまれて

- 1 ゴケイ的な条約を結ぶ
- 2 進路決定のケイキとなる
- 3 新入社員をケイハツする
- 4 先生にケイボの情を抱く
- 5 映画へのゾウケイが深い

(ウ) コウシヨウ

- 1 演劇界のキヨシヨウと出会う
- 2 国王のシヨウゾウ画を描く
- 3 課長にシヨウシンする
- 4 改革は時期シヨウソウだった
- 5 雪のケツシヨウを観察する

問二 空欄 I) IV に入る語句・表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|------------|-------------|-------------|------|------|
| I | 1 過渡 | 2 転換 | 3 端境 | 4 揺籃 | 5 臨界 |
| II | 1 性急 | 2 性向 | 3 性根 | 4 塑性 | 5 定性 |
| III | 1 アフォリズム | 2 オリエンタリズム | 3 コスモポリタニズム | | |
| | 4 セクシヨナリズム | 5 センチメンタリズム | | | |
| IV | 1 黙して愁眉を開く | 2 満足して身を焦がす | 3 豪語して悦に入る | | |
| | 4 広言して腹を癒す | 5 妄言に寝食を忘れる | | | |

問三 傍線部 A 「弱い人工知能」と B 「強い人工知能」とあるが、これらの説明として適当ではないものを次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 「弱い人工知能」とは、人間の知能一般とは異なり、ある特定の目的だけが遂行可能な道具のようなものである
- 2 「囲碁蟻」という存在を仮想してみると、一般的な「知能」と「弱い人工知能」の対比が浮き彫りになってくる
- 3 人工知能は人間の知能とまったく異質であっても構わないという思考の転換が、「弱い人工知能」の発展を促した
- 4 「強い人工知能」の不可能性に気づいた研究者は肯定的な表現を忌避し、「弱い」という語を冠するようになった
- 5 人工知能の歴史を紐解くと、まず「強い人工知能」が志向され、現在は「弱い人工知能」が研究の中心課題である
- 6 脳神経系に限らない広い意味での「知能」を研究することで、「強い人工知能」の作成に到達できる可能性はある

問四 傍線部C「知能」もしくは知的能力という概念について議論をしてみたいとあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「知能」や知的能力という言葉を使った議論は、人間について語ることが前提となっているという常識が誤っていることを提示し、人間と同質の「知能」や知的能力を他の生物が持つことを紹介したいから
- 2 「知能」や知的能力について考えようとすると、これらは考える主体である人間が備えているものであるがゆえに人間特有のものである、という誤った認識に陥りがちである点を正したいから
- 3 「強い人工知能」の実現には、人間固有の特質だと多くの人が考えている「知能」や知的能力というものが、人間とは異なる論理ではあるものの他の生物も備えているものであるという認識が必要だから
- 4 「知能」や知的能力は人間が備えているものである以上、これらについての考えが千差万別になることは避けられないので、いったん正しく定義づけを行うことでこの先の議論に一貫性を持たせたいから
- 5 人工知能の議論の本質は、「強い」や「弱い」といったこれを形容する部分ではなく「知能」や知的能力とはどういうものかという点にあるので、これまでの議論から話題を転じる必要があったから

問五 空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 私たち自身の知性に根拠のない超越性を求めるのは、少なくとも私たちが今日信じる科学的態度ではない
- 2 生物がそれぞれの「知能」や知的能力を持っているという考えを、非科学的とまで言い切るのには慎みたい
- 3 人間は電磁気学的空間を理解する能力を生得的に持っているが、唯一無二の「知性」とは言えないのである
- 4 逆に言えば、人間以外の生物がその知性を根拠に持っている能力や世界観を羨む必要も同様にならないのである
- 5 人工知能を進化・深化させていくには、人間の「知性」を明らかにすることが最も優先される課題である

問六 以下はこの文章を読んだ高校生の会話である。空欄 Y に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

Aさん 本文の後半では、他の生物の事例が多く挙げられているけれど、最後の「ウイルス」は鳥や蟻とは何か違う事例なのだろうか。

Bさん 鳥や蟻の事例は、

Y

ために挙げられたのではないかな。

Aさん なるほど。

- 1 人間も備えている空間認知や移動能力について、人間との差異に焦点を当てて説明していたね。しかし知能には自身のコピーを拡散させるという、人間にはまったく必要とされないものも存在することを紹介する
- 2 進化の歴史を経ている生物の知能を説明するために挙げられていたものだね。ウイルスの事例は、発生以来ほぼ進化していない生物にあっても知能を持ちうることから、知能が生物に根源的に備わっていることを伝える
- 3 主に空間認知に関わる知能を紹介するためのものだけれど、これだけでは知能の条件としての身体器官を想起する読者がいるかもしれないよね。それを否定し、知能というものはより広範に捉えることが可能だということを説明する
- 4 身近な生物として挙げられていたけれど、ウイルスは科学の進歩があつてこそ存在を確認できた生物だよ。人間が知能というものの理解を次第に深めていったように、「強い人工知能」も不可能ではないことを主張する
- 5 人間の知能の一つである視覚で認知可能な生物の知能を紹介するためのものだったよね。これに加えてウイルスという微細な生物にも知能があることを伝えて、生物の知能が想像以上に世界に溢れていることを実感してもらおう

問七 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 人間の持つ知能の姿を解明することに多額の予算を投入することが、「強い人工知能」の実現を早いものにする
- 2 人間は他の生物が人間の知的能力で不可能なふるまいをすると、人間中心主義的な考えからある種の不快感を覚える
- 3 他の生物に見られる人間の知的能力と同じような行動も、必ずしも人間と同じ論理で行われているとは限らない
- 4 人間は言葉という強力な抽象化の手段を持ったために、三次元的な視野や移動手段を手に入れることが可能になった
- 5 知性や知能に対して進化論的な立場から人間中心的理解を推し進めることで、「強い人工知能」は実現可能である
- 6 人間とは異なる知能を本質的に理解することはできないが、その存在を認識し進化の過程を考えるのは有意義である

国語解答用紙 1日[*]

一
問一
(ア)
①
②
③
④
●
(イ)
①
●
③
④
⑤
(ウ)
①
②
●
④
⑤

問二
i
●
②
③
④
⑤
ii
①
②
③
●
⑤

問三
I
①
●
③
④
⑤
II
①
②
③
●
⑤
問四
①
②
●
④
⑤

問五
①
②
③
④
●
問六
①
●
③
④
⑤
問七
①
●
③
④
⑤

問八
●
②
③
④
⑤
問九
●
②
③
④
●
⑥

二
問一
(ア)
●
②
③
④
⑤
(イ)
●
②
③
④
⑤
(ウ)
①
②
③
●
⑤

問二
I
①
②
③
●
⑤
II
①
●
③
④
⑤
III
①
②
③
④
●
IV
①
②
●
④
⑤

問三
①
②
●
⑤
⑥

問四
①
●
③
④
⑤
問五
●
②
③
④
⑤

問六
①
②
●
④
⑤

問七
①
②
●
④
⑤
●

48点

52点